

【研究資料】

生活環境が中学生の自尊感情に与える影響

—東京都 都市部と離島における因子構造モデルによる検討—

池本 彩乃¹⁾, 佐藤 穂花^{2,3)}, 鈴川 一宏³⁾, 岡本美和子³⁾

¹⁾ 日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程スポーツ教育・健康教育学系

²⁾ 日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程身体教育・健康教育コース

³⁾ 日本体育大学健康医療系

Effects of living environment on the self-esteem of junior high school students: Factor structure modeling in Tokyo urban area and isolated islands

IKEMOTO Ayano, SATO Honoka, SUZUKAWA Kazuhiro and OKAMOTO Miwako

Abstract: This study aimed to clarify the effects of the urban area and isolated island living environments on the self-esteem of junior high school students using a factor structure model. The subjects were 577 junior high school students in urban areas and 135 junior high school students in three isolated island schools. The survey was conducted from September to October 2022 using a self-administered, unmarked questionnaire. The survey items were related to lifestyle, relationship with surroundings, residential area, experiences, self-evaluation, and a self-esteem scale and the POMS. As a result of factor analysis, a seven-factor structure was extracted for urban areas and five factors for isolated islands. Subsequent covariance structure analysis revealed that the parent-child relationship had the most substantial influence on self-esteem in both urban areas and isolated islands. In particular, children's daily conversations with their parents and their feeling of recognition and acceptance increased their self-esteem. In addition to the parent-child relationship, teachers were included in the isolated islands items, indicating that children have closer relationships with their parents than in urban areas. Furthermore, it became clear that good relationships with parents and others lead to sharing nature and various experiences, which fosters self-esteem. It was also confirmed that increased self-esteem enhances a sense of physical health by ensuring a good night's sleep.

In this study, we were able to clarify the factors that structurally affect self-esteem through the direct and indirect influence of various factors through the factor structure model.

要旨: 本研究は、都市部と離島の生活環境が中学生の自尊感情に及ぼす影響を、因子構造モデルを用いて明らかにすることを目的とした。対象は、都市部の中学生 577 名と離島 3 校の中学生 135 名である。調査は 2022 年 9 月から 10 月にかけて、無記名の自記式調査票を用いて実施した。調査項目は、生活習慣、周囲との関係、居住地域、体験、自己評価に関するもので、自尊感情尺度、POMS を用いた。因子分析の結果、都市部では 7 因子、離島では 5 因子の構造が抽出された。その後の共分散構造分析の結果、都市部と離島ともに、親子関係が自尊感情に最も大きな影響を与えることがわかった。特に、親との日常的な会話や、認められ、受け入れられているという実感が、子どもの自尊感情を高めていることが明らかとなった。離島の項目には、親子関係に加え教師が含まれており、都市部よりも親との関係が密であることがわかる。さらに、親などとの良好な関係が、自然体験や様々な体験の共有につながり、自尊感情を育むことが明らかになった。また、自尊感情の向上は、良質な睡眠を確保することで身体的健康感を高めることが確認された。

本研究では、因子構造モデルにより、様々な因子の直接的・間接的な影響により、自尊感情に構造的に影響を与える因子を明らかにすることができた。

(Received: April 11, 2023 Accepted: August 4, 2023)

Key words: Parent-child relationship, Lifestyle habit, Experiences, covariance structure analysis

キーワード: 親子関係, 生活習慣, 体験, 共分散構造分析

1. 緒 言

自尊感情とは「生まれてきてよかった」「自分にはできることがある」等、自分自身を基本的にかげがえない価値ある存在とする感情であり（文部科学省 a, 2017）、その概念は心理学で最初に言及したJames (1890) によって「自尊感情=成功/願望」と定義されている。また、Rosenberg (1965) は自尊感情を「自己に対する肯定的あるいは否定的態度」としており、「自分自身の価値基準に照らして自分を価値のある人間だと尊重すること」としている。さらに、東京都教育センター (2010) はRosenbergの定義を踏まえ、自尊感情を「自分の出来ること出来ないことなどすべての要素を包括した意味での、『自分』を他者との関わり合いを通してかけがえない存在、価値のある存在としてとらえる気持ち」と定義づけている。

我が国では、以前から児童期・青年期にかけての自尊感情が年々低下しており、問題視されている（古荘, 2009）。思春期に自尊感情が低下しやすい要因には、第二次性徴やそれに伴う容姿の変化への拒否や葛藤といった身体的要因（加藤・西, 2010）や、小学校から中学校の移行に伴う環境要因（Ogihara, 2016）などがある。なかでも共通して指摘される要因に、思春期における思考や認識の発達がある（加藤, 1987）。また、自尊感情は生活習慣（兄井ら, 2013）、体験（横山, 2010）、周囲との関係（加藤・西, 2010）などの環境要因と密接に関係している。これらの要因による自尊感情の低下は、精神的健康や人間関係、いじめ等の問題行動に密接に関連することや、成人期のメンタルヘルスや逸脱行動といった問題に結びつきやすいことが指摘されている（加藤ら, 2018）。自尊感情を育むことは、ストレスや否定的情動に対する緩衝剤となり適応感を高めることに繋がり、自分を肯定的に捉えられることで「生きる力」の源に繋がる（賀川・横田, 2003）。したがって、学校・家庭・地域がその大切さを認識し、連携して育てていくことが求められる（文部科学省 b, 2017）。

しかし、近年日本では都市化や少子化、核家族化、共働き世帯の増加などの社会や、ライフスタイルの急激な変化に伴う家庭や地域の教育力の低下が指摘されている（中央教育審議会, 2000）。また、子どもの自尊感情は親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもの交流の場の減少、自然体験等の体験活動の減少などによって、乏しい傾向にあることが示されている。

一方、僻地といわれる離島地域では、豊かな自然環境や歴史遺産が国民の健康保養や癒しの場を提供している。しかし、離島では高度経済成長期の産業構造の転換、進学・就職による若者の転出増加等により人口

減少や高齢化が急速に進んでおり、所得や雇用の場の減少、従来のコミュニティ機能の低下、学校の統廃合、医療施設の縮小・閉鎖などによって、さらに人口減少が進み、本土との格差が問題となっている（国土交通省, 2018）。したがって、離島に住む子どもの自尊感情は、地域性による生活環境や居住環境、人間関係による影響を受けることが考えられ、子どもの自尊感情の形成に与える影響は、都市部と離島では異なると考えられる。しかし、これまで自尊感情に関する研究は数多く行われてきたものの、それらは本島を対象としたものが多く離島を対象とした研究はごく希少である。さらに、居住地域の特徴に関連した生活環境の違いが自尊感情に与える要因について、構造的にモデル化して解明を試みた研究は見受けられない。

そこで本研究では、様々な要因が複雑に関連しているとされる自尊感情について、関連する要因間の構造を明らかにするために共分散構造分析を用い、都市部と離島の生活環境が中学生の自尊感情に与える影響を因子構造モデルによって検討することを目的とした。

2. 方 法

2.1 調査対象および期間

本研究は自記式質問紙法による横断研究とした。

なお、本研究では、居住地域の特徴に関連した生活環境の違いが中学生の自尊感情に与える影響要因について明確にするため、同都道府県内の都市部と離島に限定して比較検討を行った。

本研究における調査は、対象地域の教育委員会ならびに対象校に対し、書面と口頭にて調査の趣旨及び内容について説明した。対象者は、東京都内の公立中学校1校（以下、都市部）に在籍する生徒1年生から3年生の合計632名と、東京都の離島の公立中学校3校（以下、離島）に在籍する生徒1年生から3年生の合計149名とした。そのうち調査への参加不同意の者と回答に不備があった者を除外し、都市部は1年生から3年生の合計577名（男子311名、女子266名）、離島は1年生から3年生の合計135名（男子67名、女子68名）を分析対象とした。なお、回答は無記名とし、同封した返信用封筒で郵送にて回収した。また、調査期間は、2022年9月から10月にかけて実施した。

2.2 調査項目

質問項目は生活習慣に関する項目（主観的健康感、就寝時刻、起床時刻、朝食摂取頻度、主観的ストレス、運動習慣、外遊び時間）、人間関係に関する項目（相談相手の有無、居場所の有無、競争相手の有無、親・友人・教師との関係性）、体験に関する項目（海や川遊び経験、魚釣り経験、山の登りやキャンプ経験、昆虫や

動物の育成経験等) 自己評価に関する項目(成し遂げ経験, 周囲のサポートの有無, 自己期待感)とした。また, 疲労度調査としてPOMS短縮版(横山, 2005)を使用し, 心理的なストレス指標としてTMD得点を算出して用いた。さらに, 自尊感情尺度にはRosenberg(1965)が作成した尺度を山本ら(1982)が邦訳した自尊感情尺度日本語訳版を用いた。

2.3 分析方法

都市部と離島のデモグラフィックデータ, 自尊感情の高さと自尊感情の要因を比較検討する上で, 比率の差の検定には χ^2 検定, 平均値の差の検定には対応のないt検定を行った。次に, 自尊感情に影響を与える潜在変数を導出するため潜在変数を構成する因子項目を抽出する作業を行った。自尊感情に影響を与えると考えられる全38項目については, 井上ら(2020)にならない最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果から, 先行研究に基づき自尊感情に影響を与えると考えられる潜在変数間の因果の関係を検討し, 因子構造の明確化を図る目的として共分散構造分析を行った。共分散構造分析では, モデルの安定性を高めるため最尤推定法で行い, 提示する数値をすべて標準化数値で示した。モデルの当てはまりの良さを評価するため, GFI(適合度指標: goodness of fit index), AGFI(修正適合度指標: Adjusted Goodness of Fit Index), CFI(比較的適合度指標: comparative fit index), RMSEA(平均二乗誤差平方根: root mean square error of approximation)を参考にした。モデルの相対的な評価にはAICの値(Akaike's Information Criterion)を指標とした(豊田, 2004)。

なお, 分析統計ソフトにはIBM SPSS Statistics Ver.27およびIBM SPSS Amos27 for Windowsを使用し, いずれの分析も有意水準は5%未満とした。

2.4 共分散構造分析について

共分散構造分析とは, 観測データの背景にある様々な要因の関係を分析する統計手法である。潜在変数や観測変数を用いてモデルの検討を行うことができ, 観測されたデータ(自尊感情に影響すると考えられる項目)だけではなく, 直接測定されない概念(自尊感情)を含んだ因果関係を明らかにすることができる。本研究で提示するモデル図では, 観測変数(都市部21項目, 離島15項目)を自尊感情およびTMD得点と同様に長方形で示し, 構造概念を表す潜在変数については楕円形で表し, 観測変数や潜在変数のみで説明しきれない誤差変数を e とした。そして, 観測変数は潜在変数から影響を受けていることを意味する単方向矢印は因果関係を示し, 矢印の元にある変数が矢印の先にあ

る変数に対して影響を与えていることを仮定するものとする(豊田, 2004)。さらに, 双方向に向く矢印の場合は, 共変関係として示し, 片方の変数が高まると同様に他方も高まることを仮定するものである。なお, 潜在変数と観測変数の名称に関して, 本文で用いる際は「」を使用した。また, 本研究では, 共分散構造分析を用いて直接効果, 間接効果, 総合効果を検証し, 複雑化した要因について構造化することを試みた。

2.5 倫理的配慮

本研究は, 日本体育大学倫理審査委員会の承認(承認番号: 第022-H093号)を得て行った。調査は, 対象地域の教育委員会ならびに対象校の管理職, 教職員に対し, 研究の趣旨と内容, 方法および個人情報等に関する倫理的事項の取り扱いについて, 書面および口頭にて説明を行い, 同意を得て実施した。また, 対象の生徒に対しては, 書面にて調査の参加ならびに中断における個人の自由意志の尊重, 調査において個人は特定されず, 成績評価にも反映されないことを説明した。さらに, その旨の教示文を実施者が音読することでそれらを周知した。

3. 結果

3.1 対象者の特徴

都市部では質問紙配布数632部に対し, 回収数は577部で回収率91.3%(男子331名, 女子226名)であった。また, 離島では配布数149部に対し, 回収数は135部で回収率90.6%(男子67名, 女子68名)であった。都市部と離島のデモグラフィックデータを表1, 表2に示した。その結果, 都市部と離島の人間関係に関する項目の比較では, 居場所の有無($p<0.05$), 相談できる相手の有無($p<0.01$)は「ある」と回答している者が離島において有意に多かった。また, 体験に関する項目では, 海や川での遊び経験($p<0.001$), 魚釣りをした経験($p<0.001$), 山登りやキャンプをした経験($p<0.001$), 昆虫採取・育成経験($p<0.01$), 生き物の世話($p<0.01$), 自然や空き地遊び経験($p<0.001$)において離島が「何度もある」と回答した者が有意に多かった。さらに, 「休日の外遊び時間」($p<0.001$)も同様に離島の方が有意に多かった。しかし, 従属変数である自尊感情とTMD得点の比較では, 都市部と離島において有意な差は認められなかった。

3.2 因子分析と因子の命名

共分散構造分析を行う上で, 分析項目の選定を行った。因子分析を用いて各項目と因子間の当てはまりの良さを探ることは, 構造モデルの安定感を高めることに繋がる。そこで, 因子負荷量が0.35に満たない低い

表1 本調査の名義尺度におけるデモグラフィックデータ

質問項目	選択項目	都市部 (n=577)	離島 (n=135)	p
性別	男	311(53.9)	67(49.6)	n.s.
	女	266(46.1)	68(50.4)	
健康観	とても健康だと思う	369(64.5)	97(71.9)	n.s.
	あまり健康ではない	189(33.0)	36(26.7)	
	全く健康ではない	14(2.4)	2(1.5)	
ストレス	全く感じない	53(9.2)	9(6.7)	n.s.
	たまに感じる	338(59.0)	81(60.0)	
	よく感じる	182(31.8)	45(33.3)	
ストレス解消法の有無	有 実行している	348(60.9)	94(69.6)	n.s.
	有 実行していない	130(22.8)	26(19.3)	
	無	93(16.3)	15(11.1)	
居場所の有無	有	500(87.7)	128(94.8)*	<0.05
	無	70(12.3)*	7(5.2)	
相談できる相手の有無	有	462(80.6)	122(90.4)*	<0.01
	無	111(19.4)*	13(9.6)	
海や川で野遊び経験	何度もある	275(48.2)	275(93.3)*	<0.001
	少しある	220(38.5)*	9(6.7)	
	全くない	76(13.3)*	0(0)	
魚釣りをした経験	何度もある	235(41.2)	101(74.8)*	<0.001
	少しある	232(40.6)*	26(19.3)	
	全くない	104(18.2)*	8(5.9)	
山登りやキャンプをした経験	何度もある	237(41.4)	88(65.2)*	<0.001
	少しある	232(40.6)	44(32.6)	
	全くない	103(18.0)*	3(2.2)	
昆虫採集・育成経験	何度もある	195(34.3)	66(48.9)*	<0.01
	少しある	214(37.6)*	37(27.4)	
	全くない	160(28.1)	32(23.7)	
生き物の世話経験	何度もある	283(49.6)	86(63.7)*	<0.01
	少しある	156(27.3)	31(23.0)	
	全くない	132(23.1)*	18(13.3)	
自然や空き地遊び経験	何度もある	283(49.6)	92(68.7)*	<0.001
	少しある	203(35.6)	39(29.1)	
	全くない	85(14.9)*	3(2.2)	
「外遊び」か「中遊び」の好み	外遊び好き	222(40.7)	59(46.1)	n.s.
	中遊び好き	323(59.3)	69(53.9)	
友人をライバルとして意識する	する	378(66.2)	91(67.4)	n.s.
	しない	193(33.8)	44(32.6)	
地域愛着	住んでいる地域が好き	520(91.2)	122(90.4)	n.s.
	住んでいる地域が嫌い	50(8.8)	13(9.6)	
将来も住みたい(住んでいる地域)	住みたい	99(17.7)	21(15.9)	n.s.
	住みたくない	93(16.6)	33(25.0)	
	まだわからない	367(65.7)	78(59.1)	

分析には χ^2 検定を用いた。
調整済みの残差において1.96より大きい値を*で示した。

表2 本調査のスケールデータにおけるデモグラフィックデータ

項目	都市部 (n=577)	離島 (n=135)	p値
平日睡眠時間(分)	454.2 ± 67.5	468.9 ± 129.8	n.s.
休日睡眠時間(分)	506.6 ± 85.8	512.1 ± 83.7	n.s.
平日遊び時間(分)	43 ± 61	46 ± 57	n.s.
休日遊び時間(分)	99 ± 138	156 ± 123	<0.001
自尊感情尺度(点)	30.5 ± 7.4	31.2 ± 7.2	n.s.
TMD得点(点)	29.6 ± 23.1	29.6 ± 22.7	n.s.

分析には対応のないt検定を用いた。

因子負荷量の項目を省き、再度探索的因子分析を行った。因子数の決定には因子のスクリープロット図を参考にした(岡本, 2006)。その結果、都市部では7因子構造(22項目)が、離島では6因子構造(17項目)が抽出された。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子の命名(今後、潜在変数には命名した語を使用する)、分析項目とモデル図に用いる標語(今後、観測変数には標語を使用する)、因子負荷量について都市部を表3、離島を表4に示した。各項目への因子負荷量の大きさや質問項目内容から、都市部の7因子を「自然体験」「親子関係」「安心できる居場所」「外

遊び時間」「身体的健康感」「競争経験」「睡眠時間」と命名した。また、離島の6因子を「自然体験」「身近な大人との関係」「外遊び時間」「身近な相談者」「生き物の世話経験」「運動と睡眠」と命名した。

3.3 構成概念妥当性の検討とモデルについて

都市部の第1因子「自然体験」の項目である「自然や空き地・路地で遊んだことがある」と離島の第5因子「生きものの世話経験」の2項目は、「自然体験」に含まれる5つの項目と意味合いが近く、それぞれ該当する項目を含めた場合にモデルが識別されなかった。しかし、除去後は識別可能となったことから、モデルの項目として不必要項目と判断した。モデル適合度が低かったことから先行研究(井上ら, 2020)にならぬ、その項目を除くことでモデルの検証を再度行った。その結果、都市部と離島ともにモデル適合度の高い結果を得ることができたことから、都市部の自尊感情に影響を与えると考えられる因子構造を7因子21項目で採用することとした。また、離島の因子構造は5因子15項目を採用した。その後、再度共分散構造分析を行い、全ての潜在変数と観測項目を用いて探索的に分析を繰り返した結果、都市部と離島ともに説明が可能でモデル適合度の高い因果モデルに到達した。都市部におけるモデルの適合性の評価は、GIF=0.928, AGFI=0.904, CFI=0.888, RMSEA=0.050であった。また、離島におけるモデルの適合性の評価は、GIF=0.898, AGFI=0.852, CFI=0.962, RMSEA=0.038であった。いずれの対象地域においても指標のモデルとデータ間の適合性は高いことを説明しており、モデルとして妥当といえる。モデルの部分的評価として、構成概念である潜在変数から観測変数に与える影響指数は、都市部と離島の全てにおいて0.23以上の値を確認し、潜在変数と観測変数が適切に対応していると考えられた。作成したモデルは都市部を図1に、離島を図2に示した。モデル図では、自尊感情とTMD得点、観測変数(都市部21項目、離島15項目)を長方形で示し、構造概念を表す潜在変数を楕円形で表している。観測変数や潜在変数のみで説明しきれない誤差変数をeとした。複雑さを避けるため、各潜在変数や観測変数に関連する誤差変数の表示は省略した。

3.4 共分散構造分析による因果モデルの構成と効果

対象地域それぞれのモデルである潜在変数間の因果関係を検証し、その影響力の大きさを全体として評価するための指標として総合効果(直接効果+間接効果)を検証した。

都市部のモデルの結果より、自尊感情に直接的に効果を与える項目として「親子関係」0.31 (p<0.001),

表3 都市部, 因子の命名と各質問項目と標語, 斜交プロマックス回転後の因子負荷

因子の命名	分析で用いた質問項目と標語	因子負荷							
		I	II	III	IV	V	VI	VI	
自然体験	海や川で貝を捕ったり魚を釣ったりしたことがある	【魚釣り】	.780	.044	-.096	-.010	.095	-.042	.014
	海や川で泳いだことがある	【海川遊び】	.669	.011	-.071	.002	.069	-.019	-.040
	山登りやキャンプをしたことがある	【キャンプ】	.589	-.132	.025	.023	.034	-.017	-.078
	虫を捕まえたことや昆虫を育てたことある	【昆虫採取】	.579	-.038	.147	-.025	-.136	.013	.090
	ペットや生き物の世話をしたことがある	【動物世話】	.508	.103	-.014	-.013	-.171	.119	.082
	自然のは場所や空き地で遊んだことがある	【空き地】	.442	-.046	.069	.032	.077	-.259	-.026
親子関係	親と話すこと	【親との会話】	.005	.879	-.138	-.023	-.133	.047	.011
	親は話を聞いてくれる	【親の受け入れ】	-.035	.651	.088	.035	.007	.015	-.028
	親に何でも話することができる	【親への信頼】	-.039	.494	.235	.051	.133	-.092	-.023
安心できる居場所	困った時に相談できる人がいる	【相談相手】	.001	.008	.763	-.014	-.118	.005	-.036
	自分らしくいられる居場所がある	【居場所】	.029	.163	.552	-.019	.088	-.105	.065
	ストレス解消法を持っている	【ストレス解消法】	.011	.025	.488	-.069	.018	.228	-.021
	本音や悩みを話せる友達がいる	【親しい友人】	-.008	-.130	.447	.067	.059	.047	.030
外遊び時間	休日の外遊び時間	【休日外遊び時間】	-.024	-.061	.039	.961	.026	.044	.007
	平日の外遊び時間	【平日外遊び時間】	.029	.106	-.038	.588	-.117	-.022	.014
身体的健康親	運動部に所属している	【運動部】	-.070	-.116	-.049	-.064	.552	.110	.018
	運動やスポーツをする場所・環境に満足している	【運動満足】	-.001	-.029	.150	-.031	.447	.004	.040
	健康である	【健康観】	.098	.208	-.063	.012	.418	.076	-.074
競争経験	集団で成し遂げた経験がある	【成し遂げ経験】	.007	-.002	.106	-.021	.023	.576	-.052
	友達をライバルとして意識したことがある	【ライバル意識】	-.005	.024	-.016	.066	.159	.521	.069
睡眠時間	休日の睡眠時間	【休日睡眠時間】	-.031	.028	-.038	-.025	.090	-.047	.765
	平日の睡眠時間	【平日睡眠時間】	.078	-.065	.076	.057	-.105	.075	.416
抽出後の負荷量平方和 累積 (%)			10.000	21.123	30.183	34.555	37.485	40.151	42.415
		因子相関行列							
		I	-	-.101	-.137	.220	-.114	-.344	-.028
		II		-	.589	-.098	.256	.204	-.199
		III			-	-.160	.338	.330	-.040
		IV				-	-.297	-.166	-.016
		V					-	.169	.033
		VI						-	.000
		VII							-

表4 離島, 因子の命名と各質問項目と標語, 斜交プロマックス回転後の因子負荷

因子の命名	分析で用いた質問項目と標語	因子負荷						
		I	II	III	IV	V	VI	
自然体験	山登りやキャンプをしたことがある	【キャンプ】	.863	-.027	.027	-.052	-.043	-.053
	自然のは場所や空き地で遊んだことがある	【空き地】	.703	-.001	.021	.118	.067	-.058
	海や川で泳いだことがある	【海川遊び】	.561	.017	-.081	-.047	-.085	.167
	海や川で貝を捕ったり魚を釣ったりしたことがある	【魚釣り経験】	.514	-.044	.041	-.087	.271	.040
身近な大人との関係	親は話を聞いてくれる	【親の受け入れ】	.021	.915	-.016	-.092	-.012	.035
	親と話すこと	【親都の会話】	-.114	.583	.048	.105	.094	.000
	先生は話を聞いてくれる	【教師の受け入れ】	-.066	.467	-.106	.042	.092	-.053
	親に何でも話することができる	【親への信頼】	.224	.439	-.071	.194	-.203	-.056
外遊び時間	休日の外遊び時間	【休日遊び時間】	.099	.008	.932	.009	-.094	-.018
	平日の外遊び時間	【平日遊び時間】	-.103	-.081	.769	.087	.039	.014
身近な相談者	本音や悩みを話せる友達がいる	【親しい友人】	-.015	.037	-.076	.994	-.082	.040
	困った時に相談できる人がいる	【相談相手】	-.013	.053	.162	.631	.151	-.017
生き物の世話経験	虫を捕まえたことや昆虫を育てたことある	【昆虫育成】	.093	.092	-.036	.085	.849	.013
	ペットや生き物の世話をしたことがある	【動物の世話】	-.021	-.022	-.029	.015	.465	-.018
運動と睡眠	外遊びが好き	【外遊び好き】	-.036	.075	-.171	-.114	-.002	-.566
	平日の睡眠時間	【平日睡眠時間】	.069	-.208	-.180	.034	.022	.520
	運動部に所属している	【運動部】	.043	-.269	-.111	.136	.032	-.490
抽出後の負荷量平方和 累積 (%)			12.659	28.624	37.496	45.675	48.767	51.991
		因子相関行列						
		I	-	-.128	.320	-.105	.575	.361
		II		-	-.182	.368	-.301	-.130
		III			-	-.252	.271	.506
		IV				-	-.267	-.234
		V					-	.243
		VI						-

「競争経験」0.31 ($p < 0.01$), 「自然体験」0.12 ($p < 0.05$), 「TMD 得点」0.14 ($p < 0.01$), があり, 有意な相関関係にあることが認められた。また, 外生変数である「安

心できる居場所」は2つの共変関係にあり, 「親子関係」0.73 ($p < 0.001$)と「競争経験」0.43 ($p < 0.001$)に正の相関の共変関係が認められた。これらの両潜在変

生活環境が中学生の自尊感情に与える影響

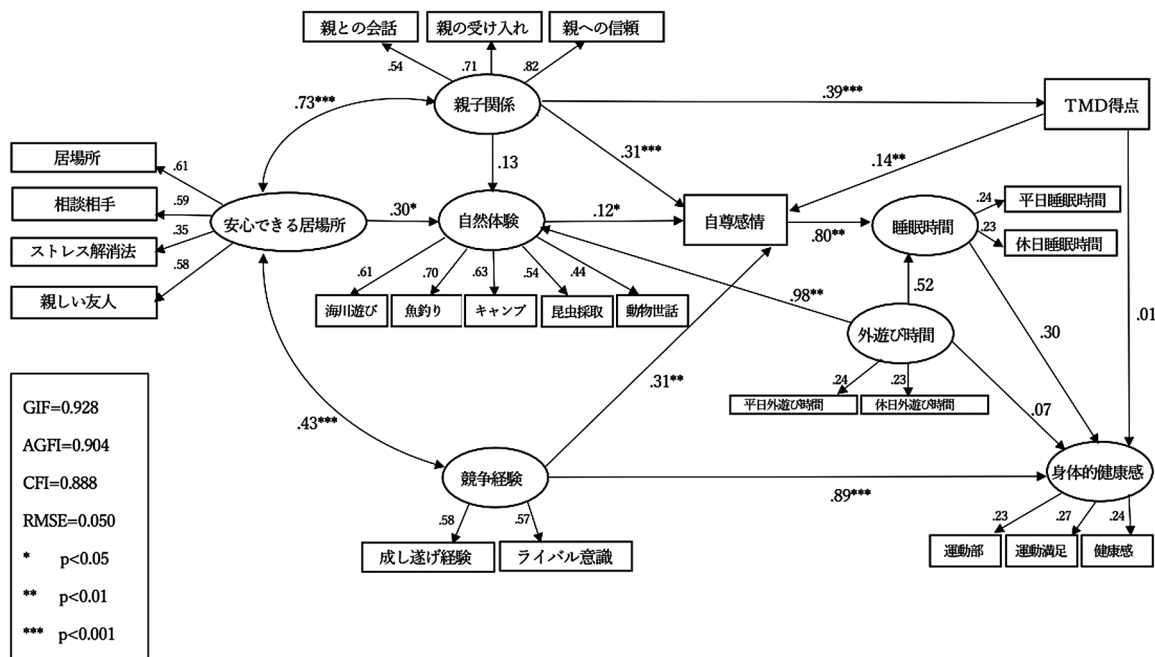


図1 都市部の「自尊感情」と関連要因における因果モデル

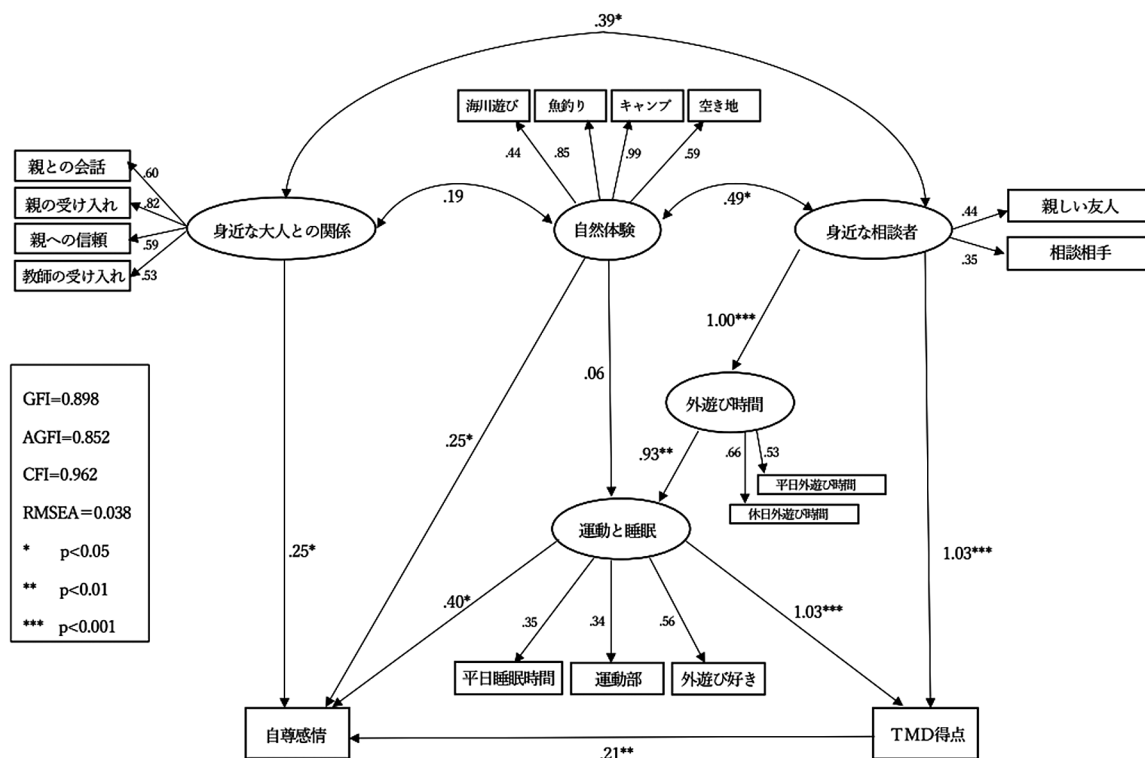


図2 離島の「自尊感情」と関連要因における因果モデル

数が「自尊感情」に影響を与え、「親子関係」が良好な環境にいる子どもほど、「安心できる居場所」が得られることが示された。さらに、「競争経験」は「安心できる居場所」を保持することで、友人と運動や部活動などで競い合ったり、集団で何かを成し遂げたりした経験である「競争経験」が高まることを示していた。そして、「安心できる居場所」は直接的には「自尊感情」

に影響していないが、「自然体験」0.30 (p<0.05) との直接的効果が認められ、「自然体験」を介して「自尊感情」に影響を与えていることが認められた。

次に、「自尊感情」に対し、因果的な影響力の大きさを全体として評価するための指標として総合効果を検証した。「親子関係」から「自尊感情」に対し2つの総合効果が認められた。一つ目は、「TMD得点」を介す

ることで総合効果は0.36と高まった。二つ目は、「自然体験」を介することで総合効果は0.33と高まった。この結果から「親子関係」が直接的に自尊感情に及ぼす効果よりも「TMD得点」,「自然体験」のそれぞれを媒介する効果のほうが大きいことが認められた。

続いて、都市部のモデルではほとんどの潜在変数が従属変数である「自尊感情」に向かっているのに対し、「睡眠時間」は「自尊感情」0.80 ($p<0.01$) から直接的に強い影響を受けていることが認められた。さらに、「自尊感情」の高まりが「睡眠時間」0.30に影響し、その結果「身体的健康感」を高めることが認められた。

離島のモデルでは、自尊感情に直接的に効果を与える項目として、「運動と睡眠」0.40 ($p<0.05$)、「自然体験」0.25 ($p<0.05$)、「身近な大人との関係」0.25 ($p<0.05$)、「TMD得点」0.21 ($p<0.01$)があり、有意な相関関係が認められた。また、「身近な大人との関係」と「自然体験」は0.19、「自然体験」と「身近な相談者」0.49 ($p<0.05$)、「身近な大人との関係」と「身近な相談者」は0.39 ($p<0.05$)と共変関係にあった。総合効果については、「自然体験」から「自尊感情」への直接効果0.25 ($p<0.05$)よりも、「運動と睡眠」を媒介することによって総合効果は0.27と僅かに高まった。この結果から、2つの共変関係を伴う「自然体験」が直接的に自尊感情に影響する効果よりも「運動と睡眠」を経由した間接的効果のほうがやや高まることが認められた。2つの共変関係を伴う「自然体験」による「自尊感情」の高まりより、「自然体験」による「運動と睡眠」の確保が「自尊感情」を高めると考える方が妥当であることが示された。また、「運動と睡眠」から「自尊感情」への直接効果は0.40 ($p<0.05$)であるが、「TMD得点」を媒介することで総合効果は0.61と高まった。この結果から、「運動と睡眠」による直接効果よりも「TMD得点」を経由した間接的効果のほうが影響力を高めることが認められた。次に、「身近な大人との関係」,「自然体験」,「身近な相談者」の共変関係が「TMD得点」1.03 ($p<0.005$)を経由し、「TMD得点」から「自尊感情」0.21 ($p<0.05$)に間接的に効果を与えていることが認められた。これは身近な人間関係の良好さが身近な相談者を保有し、自然体験による様々な体験が「TMD得点」が低下させ、その結果「自尊感情」が高まると考えるのが妥当であることが示された。

4. 考 察

4.1 共分散構造分析の因果モデルによる考察

自尊感情の形成の背景には、複雑に絡み合った影響要因が存在すると推察された。本研究において共分散構造分析を用いることでその複雑な要因を構造的に示

すことができ、関係性をより明確にすることができる。その利点を踏まえ、分析を行った結果の両モデルは、都市部と離島ともに適合度の高い因果モデルであったといえる(図1, 図2)。

はじめに、都市部のモデルを考察する。外生変数である「安心できる居場所」は「親子関係」と「競争経験」と2つの共変関係にあった。多田ら(2007)によると、日常的な親との会話は子どもにとって「認められている」,「愛されている」ことを実感し、自己の存在意義を確かめることができることから、親子の会話は自尊感情の向上において重要であると述べている。つまり、日常的な親子の会話は子どもの自己受容感を高め、信頼関係を築くことで良好な「親子関係」を形成すると考えられる。また、「安心できる居場所」の項目は、親しい友人や相談者がいるといった他者の存在が自分の居場所となり、ストレスが発散されるという構造がみられた。さらに、親や友人と良好な関係にある者は相談者となり、子どもの悩みを聞くことで自分を受け入れてくれる心のよりどころとなることから「安心できる居場所」が高まったと考えられる。家庭における「居場所」は、思春期の子どもにとって重要な意味を持ち、「家族のいる居場所」が様々な機能を備えた安定した「居場所」であるため(杉本・庄司, 2006)、「親子関係」と「安心できる居場所」が結びついたと考えられる。

次に、「競争経験」では、学校生活の中で友人と勉強や部活動を通して集団で物事を成し遂げる経験や友人をライバル意識し、互いに競い合う関係が推察された。中間(2014)によると友人という存在は、自己理解や自己評価を深めたり、自己形成意識を動機づけたりする比較基準としての役割を相互に果たしており、日常において自分と友人とを比較していると述べている。そのため、友人をライバルとし学校行事等を通して切磋琢磨し合う経験は、自分の存在や役割を実感することに繋がり、他者の存在が居場所となることが示唆される。長津(2001)によると、発達過程にある子どもにとって家族関係や友人関係は自尊感情に強い影響を及ぼし、特に青年期において重要な他者が親から同性同年代の友人へと変化すると考えられている。また、身近な他者に悩みやストレス状況を多く自己開示できることに加え、相手からのサポートが得られる場合、ネガティブな気分が軽減され気分状態の改善に繋がることが報告されている(福岡, 2008)。つまり、親や友人等の身近な相談者に子ども自身が悩みやストレスの状況を開示することでストレスの軽減に繋がり、心理的居場所となることで自尊感情が高まったと考えられる。

続いて、総合効果を考察する。本研究では「親子関

係」から「自尊感情」への直接効果よりも「親子関係」から「自然体験」を介して「自尊感情」に向かう効果の方が、高値を示していた。子どもの自尊感情の高低には、親の養育態度や親子の関係性が関連していると示されてきたが(多田ら, 2007; 卜部, 2017), 親子関係に加えて自然体験を多く行うことでより自尊感情を高めていた。宮本ら(2015)によると、幼少期からの自然体験や体験活動は親の行動が大きく影響しており、子どもに対し受容的で社会教育活動に子どもを参加させる親の子どもほど体験が豊富であるといわれている。さらに、子ども同士で遊ぶ経験は、豊かな想像力を育くむとともに自らと違う他者の存在や視点に気づき、相手の気持ちになって考えたり、葛藤を覚えたりする中で道徳性や社会性の基盤が育まれることから(大森, 2008), 遊びを通じて学ぶといった自然体験や様々な体験が自尊感情に影響していると考えられる。光松は(2018), 幼児期において自然との触れ合いは創造力や好奇心を高め、心を育む基礎を培うと報告している。さらに、幼児期からの昆虫や動物の飼育経験は子どもたちの生物概念の形成を育むだけでなく、「命への思い」や「他者への思いやり」、「仲間関係を育てる」ことに繋がるため自尊感情を育む重要な要素であると示されている(山下・首藤, 2008)。特に都市部では「自然体験」の項目に「動物の世話」、「昆虫採取」が含まれており、海川遊びなどの関わりだけでなく生き物の世話経験が含まれていた。つまり、都市部の子どもは自然体験や活動が新たな経験として自尊感情に影響していることが考えられる。したがって、都市部の対象者は親や友人と良好な関係を築き、自己の存在を実感できる相手と自然体験等の様々な体験をすることで、自尊感情が高まることに繋がったと考えられる。

次に、「親子関係」から「自尊感情」への直接効果よりも「TMD得点」を介して「自尊感情」に向かう効果の方が高値を示していた。つまり、「親子関係」が良好な環境にいる子どもは「TMD得点」が低く、「自尊感情」が高まることを示していた。先行研究では、子どもの抑うつは親子関係や夫婦関係の影響を受けるとしており、母親の子どもに対する行動制限や躰の厳しさといった心理的統制の強さが子どもの不安感や抑うつなどのストレスに関連していることが明らかにされている(楊・清水, 2022)。すなわち、子どもに対する過剰な躰が、ネガティブな親子関係によるストレスとなり、子どもの自尊感情に影響を与えているといえる。この結果から、TMD得点の高さは睡眠不足などからのストレスによるものではなく、ネガティブな親子の関係性がストレス要因の1つになっていたことが推察された。

さらに、都市部のモデルではほとんどの潜在変数が従属変数である「自尊感情」に向かっているものの、「自尊感情」は「睡眠時間」を介し「身体的健康感」に向かっていた。この結果は、本研究における新たな知見であったといえる。樋口・松浦(2003)は、規則正しい睡眠時間を確保している者ほど自尊感情が高まることを示していたが、本研究において因果関係を構造的に見ることにより、自尊感情の高まりが規則正しい睡眠時間の獲得を促す構図が明らかとなった。先行研究によると、スマートフォンの接触時間が長いほど就寝時刻が遅いと指摘しており(文部科学省, 2014), さらにインターネット依存傾向にある子どもは眠りが不規則でリズムが乱れるなどの睡眠問題が生じている(原ら, 2015)。したがって、十分な睡眠時間の確保は子どもの心身の健康維持に欠かすことのできない要素(田中, 2011)であるため、親が電子機器の使用時間を管理し子どもの睡眠時間を確保するための環境づくりを行うことは、子どもの自尊感情を高めることに繋がると考えられる。また、「身体的健康感」には、「運動部」「運動満足」「健康感」といった項目が構成されていた。部活動は日中の活動性の向上といった観点から推奨されており、部活動に加入している生徒は概日リズムが整い、学校における満足度が高まることで自尊感情も高まると報告されている(坂本, 2021)。部活動に所属したり運動したりすることで、自分の良さや可能性、自分自身の限界、自分の努力により味わうことのできる成就感や達成感、仲間との心身の触れ合い、かかわり合いから味わう喜びや葛藤など、様々な素晴らしい体験が得られる(賀川・横田, 2003)。そして、これらの達成感が身体的、精神的な満足感を高めることに繋がり、健康感が高まったと考えられる。

次に、離島のモデルについて考察する。「身近な大人との関係」、「自然体験」、「身近な相談者」においてはそれぞれに共変関係が認められ、「身近な大人との関係」の項目では、都市部では見られなかった親以外の教師の項目が含まれていた。離島の学校環境は学校や学級の人数が少ないことから(谷ら, 2016), 教師が生徒一人ひとりと向き合いやすい環境にあると考えられ、対象者である生徒は教師と身近な関わりを持っていると推察される。高瀬・中島(2018)は、へき地などの小規模校では学級の生徒数、特に同学年の仲間が少ないことは、教師が個々の生徒に目が届きやすく、担任をはじめとした教職員からも励ましや称賛を受けやすい環境にあるとしている。したがって、離島の対象者は都市部と比べて親だけではなく教師を含む身近な大人から受け入れられていることや、認められていると感じるといった密接な関係性が構築されていることが窺えた。また、3つの共変関係である親や学校の

教師、友人は身近な相談者にもなり得ると考えられる。さらに、これらの共変関係は都市部のように親が自然のある環境にわざわざ連れて行ってくれるといった特別な体験ではなく、日常的に豊かな自然を活用し学外で親や友人、教師と海や川、キャンプなどの体験をしていることが推察される。文部科学省（2016）の報告では、様々な体験は「社会を生き抜く力」として必要となる豊かな人間性や人間関係形成力などの能力を養う効果があることから、幼少期から家族や地域、自然の中での豊富な刺激と体験活動を発達段階別・学校段階間に連続して継続的に行うことが必要だとしている。このことから、自然体験や多様な体験を積みこむことは子どもの自尊感情や「生きる力」を育むためにも重要であるといえる。このように、離島では学校や学外で自然を活用した遊びが「自尊感情」を高めることに繋がったと考えられる。

次に、離島のモデル図からは「身近な大人との関係」と「身近な相談者」の共変関係は、互いに良好な関係である子どもほど「TMD得点」が低く、「TMD得点」が低い子どもは「自尊感情」が高まるという一連の構造が認められた。先行研究では児童期から青年期において家族や教師、友人は自尊感情を育てていく上で欠かせないものであり（長津，2001）、多くの気づきや学び、情緒的な支えをもたらす存在として重要な役割を持つと示されている（武蔵，2016）。本調査からは、都市部では親との関係性が「TMD得点」に影響していることが認められたが、離島の対象者は親や友人、学校の教師などが子どもの良き相談者になるといった子どもの身近な対人関係の良好さが、「TMD得点」に影響し「自尊感情」を高めることが示唆された。さらに、「身近な大人との関係」「身近な相談者」「自然体験」の3つの共変関係は共に影響し合うことで直接的に「自尊感情」に向かう効果よりも間接的に「遊び時間」と「運動と睡眠」を経由することで、より「自尊感情」が高まることが示された。このことから、重要な他者である親や友人、身近な大人と良好な関係性を構築することで「身近な相談者」と「自然体験」も高まり、必然的に外遊び時間も増えることに繋がり、十分な身体活動量が得られ、適切な「運動と睡眠」が確保されることで「自尊感情」が高まったと考えられる。先行研究では、寝るべき時間に適切な睡眠を確保することや仲間と外遊びをすることが自尊感情を高めると報告されており（兄井ら，2013）、本研究を支持する結果となった。また、よく「自然体験」を行う子どもは運動部に所属することに関連が見られ、さらに外で遊ぶことを好んでいた。外遊びの時間が増えることにより一日の身体活動量が増加し、適切な「運動と睡眠」が確保されることにより「自尊感情」が高まるといった一

連の流れが推察された。子どもにとってのびのびと身体を動かし遊ぶことは、学習経験になると共に心身の調和的な発達を促す上で必重要な影響を与えることから自尊感情を育むうえでも大きな役割を果たしている（金子，2023；文部科学省，2023）。したがって先行研究同様に本研究からも自然体験や遊びの重要性が明らかとなった。

本研究で対象とした離島における総人口は、A島7,135人（東京都大島町役場，2023）、B島は2,132人と449人（東京都小笠原村役場，2023）であり、都市部の市の総人口は262,790人（東京都府中市役場，2023）であり、人口比に大きな違いがあった。人口が少ないことは人との関わりが身近であり、密接な人間関係が形成され易いことが考えられる。さらに、対象とした離島の環境は日本ジオパークや、世界自然遺産に登録されており、豊かな自然環境の中で生活していることが予想される。そのため、この環境に住む子どもたちは必然的に外遊び時間が増すことで身体活動量が増加し、睡眠時間が確保されることにより健康感が増し自尊感情が高まるという構造が見出された。

本研究の結果から、都市部と離島共に「会話」「受け入れ」「信頼」を含む項目である「親子関係」が自尊感情に最も強い関連を示していることが明らかとなった。また、離島の対象者は親だけではなく教師を含む身近な大人から受け入れられていることや、他者との密接な関係性の構築が認められ、都市部との関係性の違いが窺えた。さらに、都市部と離島では友人の役割や友人への意識に対する違いが見られた。都市部の対象者にとって友人は共に目標に向かって切磋琢磨し合い、競争することで高め合おうとする存在であった。一方、離島の対象者は、「競争経験」が項目として含まれなかった。離島の環境下は、上述したように生徒の人数が少数であることから「比べる対象が少ない」「順位がだいたい決まっている」「（部活動で）全員が出られる」（谷ら，2016）といった背景が考えられる。したがって、へき地学校では学習や部活動で競う人数が少なく、すでに順位が決まっているために競争心が低い傾向にあることから、本研究において離島の因子として「競争経験」が抽出されなかったことは先行研究を支持する結果となったといえる。一方で、離島の対象者は都市部の対象者と比較し友人との関係性が有意に高く「身近な相談者」にも含まれていた。さらに、休日の外遊び時間が長く、自然体験や体験が多いことが認められた。したがって、離島の対象者は友人との関係性が親密であり、子ども同士で自然体験や遊びの中で、自らと違う他者の存在や視点に気づき、自己理解や自己評価を深めながら遊びや経験の中で比較していると考えられ（中間，2014）、離島の遊び経験は都市部

の「競争経験」と似たような影響があるのではないかと推察された。

次に、都市部の対象者は親や友人との良好な関係性が相談相手となりストレスを解消できる「安心できる居場所」として構成されていたが、離島の対象者は親と友人に加え良好な関係性である教師が相談相手となり「身近な相談者」として構成されていた。したがって、都市部は親や友人といった限定された人間関係が居場所として構成されているのに対して離島の対象者には親と友人、学校の教師といった周囲の大人との親密な関係性が見受けられ、相談できる居場所として存在しており、子どもの身近な人間関係の違いが考えられた。

以上のことから、日常的な親との会話は子どもにとって「認められている」、「愛されている」という実感が自己の存在意義に繋がり、自己を形成することから良好な親子の関係性の重要性はもちろんのこと、親以外の他者との関係性が心理的に安定した居場所となることが認められた。さらに、親や友人、周囲の大人が子どもを自然環境に連れ出すことや、体験の幅を広げ体験の機会を増やしていくことが自尊感情を育むことに繋がることが示唆された。子どもたちの自尊感情を育むためには、子どもの日常生活に関わる親や学校の教師、地域の大人が自尊感情の重要性を認識する必要がある。さらに、「自己の存在を実感でき精神的に安心して居ることのできる場所」(小島・青木, 2018)として家庭・学校・地域がその役割を果たすことが求められる。また、親や学校の教師が日々の生活の中で子ども一人ひとりに目を向け、会話の中で子どもを認めることや受け入れる機会を増やし、子どもの話を聞くなどして向き合うことは子どもの自尊感情を育む上で重要な要素である。しかし、本土の教育現場では、30人から40人の生徒に対し一人の担任教員が学級を担当する現状にあり、日々の生活の中で子ども一人ひとりに目を向けることは困難である。したがって、担任の教師だけでなく子どもに関わる親や学校組織に関わる大人、地域の大人が家庭・学校行事・地域社会の中で子どもたちの声や思いに耳を傾け、子どもの存在を認め子どもに向き合うことが必要である。そうすることで子どもたちは、「見守られている」「支えられている」「大切にされている」と感じられる居場所をつくることができ自尊感情の育みに繋がると考えられる。

本研究で明らかになったように自尊感情の形成の根本には親からの受容や是認が必要不可欠である。そのため、自尊感情の形成において保護者や地域へのその重要性の理解を求め、学校、家庭、地域のそれぞれが異なった立場から子どもの自尊感情を育むという意識を持つことが重要である。共通意識を持ち三者一体と

なることが子どもの自尊感情を育てていくうえでの大切な力になるといえよう。

4.2 本研究の限界と今後の課題

子どもの自尊感情に影響を及ぼすとされる因子構造について都市部と離島を対象に共分散構造分析により構築された因子構造モデルの検討を行ったが、どちらも関東圏内の一都市と近辺の離島であり調査対象範囲が限定されたものであった。さらに、本研究では離島の対象校および対象者数が限られており集団数に偏りが生じたことが本研究の限界である。

そのため、今後は対象地域を拡大し対象者数を増やすことで、子どもの自尊感情への関連要因について一般化できるよう調査を継続することが必要である。また、本研究の結果では親子関係や家庭環境の違いが子どもの自尊感情に大きく影響を及ぼしていた。したがって、調査対象者の経済環境や家庭環境を調査項目に加える等して自尊感情をより多角的に要因および構造を明らかにする必要がある。

5. 結 論

本研究では、都市部とその近郊の離島における生活環境の違いが中学生の自尊感情に与える影響の関係性を探るため共分散構造分析を用い、自尊感情に影響を及ぼすとされる因子と構造について検討することを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

1) 都市部の因子構造モデルの結果

1. 自尊感情に直接効果を与える項目は、「親子関係」、「競争経験」、「自然体験」、「TMD得点」があり、「親子関係」と「競争経験」の項目は「自尊感情」に対し有意に高値を示す因果の関係が認められた。

2. 「安心できる居場所」は2つの共変関係にあり「親子関係」と「競争経験」を伴うことで「自尊感情」を高めていた。

3. 総合効果では、「親子関係」が直接的に「自尊感情」に影響する効果よりも「TMD得点」と「自然体験」を媒介することで「自尊感情」が高まっていた。「自尊感情」の高まりは「睡眠時間」を経由し間接的に「身体的健康感」を高めていた。

2) 離島の因子構造モデルの結果

1. 自尊感情に直接効果を与える項目には、「運動と睡眠」、「自然体験」、「身近な大人との関係」、「TMD得点」があった。特に「運動と睡眠」は「自尊感情」に対し有意な因果関係が認められた。

2. 総合効果では、「自然体験」が直接的に「自尊感情」に影響する効果よりも「運動と睡眠」を介すことで「自尊感情」が高まった。「運動と睡眠」は「自尊感情」に直接的に影響する効果よりも「TMD得点」を介した

ほうがより「自尊感情」を高めることに繋がっていた。また、「身近な大人との関係」「自然体験」「身近な相談者」の3つの共変関係が伴うことで「TMD得点」が減少し「自尊感情」を高めていた。

3. 「身近な大人との関係」は親子関係に加え教師の受け入れが項目に含まれおり、「身近な大人との関係」「自然体験」「身近な相談者」の3つの共変関係がそれぞれ伴うことで「自尊感情」を高めていた。これらの3つの共変関係は「外遊び時間」を増やすことに繋がりが、「運動と睡眠」を経由することで「自尊感情」を高めていた。

6. 謝 辞

本研究を実施するにあたり、貴重なご助言を頂きました島の教育委員会教育長桐川勲先生、そして多大なるご協力をいただいた調査対象校の先生方、並びに生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

文 献

兄井 彰・須崎康臣・横山正幸 (2013) 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究, 生活体験学研究, 13: 43-50.

中央教育審議会 (2000) 少子化教育について (報告). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/000401.htm, (参照日 2023年1月15日).

福岡欣治 (2008) 日常ストレス状況での友人への自己開示とソーシャル・サポート (3): 開示に対する友人からのサポートと気分状態の改善. 静岡文化芸術大学研究紀要, 8: 25-30.

古荘純一 (2009) 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告. 光文社: 東京.

原ひろみ・成 順月・沢田美代子・鮎川昌代・八島美菜子・佐々木秀美 (2015) 中高生におけるインターネット依存傾向と睡眠問題・不定愁訴の関連. 思春期学, 4(33): 387-396.

樋口善之・松浦賢長 (2003) 大学生における自己肯定感と生活習慣との関連に関する研究. 福岡県立大学看護学部紀要, 1(1): 65-70.

井上亮太郎・保井俊之・前野隆司 (2020) 仕事におけるワクワク感に関する研究—因子分析及び共分散構造分析を用いた要因の導出と構造化—. 日本感染工学会論文誌, 19(2): 215-222.

James, W. (1890) *The Principles of Psychology*. New York: Henry Holt and Company. in two volumes, vol. 1.

賀川昌明・横田直樹 (2003) 小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連. 鳴門教育大学研究紀要 (生活・健康編), (18): 9-18.

金子恵子 (2023) 幼児のしなやかな心と体の発達を促すための環境構成と援助の工夫～友達との繋がりを感ずる運動遊びを通して～. <https://www.city.uruma.lg.jp/userfiles/files/page/culture/1234/h25-kaneko.pdf>, (参照日 2023年3月15日).

加藤弘通・太田正義・松下真美子・三井由里 (2018) 思

春期になぜ自尊感情は下がるのか—批判的思考態度との関係から—. 青年心理学研究, 30(1): 25-40.

加藤隆勝 (1987) 青年期の意識構造—その変容と多様化—. 誠信書房: 東京.

加藤佳子・西 敦子 (2010) 小学生の家族関係及び友人関係における自尊感情と全体的自尊感情との関連, 61(11): 741-747.

国土交通省 (2018) 離島地域における振興施策. <https://www.mlit.go.jp/common/001229487.pdf>, (参照日 2023年1月15日).

光松佐和子 (2018) 自然環境の中で生まれる子どもの成長. 名古屋経済大学教職支援室報, 1: 231-236.

宮本康司・田中麻未・池田まさみ (2015) 幼少期の自然体験と成人後の養育態度との関連—母親の養育態度が子どもの生きる力へ及ぼす影響—. 東京家政大学研究紀要, 55(1): 85-91.

文部科学省 (2014) 睡眠を中心とした生活習慣と子供の自立等との関係性に関する調査 (報告書). 文部科学省委託調査. https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1357460.htm, (参照日 2023年1月15日).

文部科学省 (2016) 第一部 特集. 子供達の未来を育む豊かな体験活動の充実. https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201701/1389013_007.pdf, (参照日 2023年1月15日).

文部科学省 (2017) a. 文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実研究」. 幼児期の自然体験の充実を目的とした環境デザイン及び身近な自然体験の充実を活用した環境学習プログラムの開発に関する研究. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/22/1405211_02.pdf, (参照日 2023年1月15日).

文部科学省 (2017) b. 資料3-2. 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓ひらく子供を育む教育の実現に向けた学校・家庭・地域の教育力の向上 (第十次提言). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2017/06/27/1387211_07_1.pdf, (参照日 2023年1月15日).

文部科学省 (2023) 3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm, (参照日 2023年1月15日).

武蔵由佳 (2016) 児童期青年期の友人関係研究の展望—友人関係の構造, 発達の变化, 個人内要因の視点から—. 早稲田大学大学院教育研究科紀要, 23(2): 13-23.

長津美代子 (2001) 家族の個別化・凝集性と中学生の自尊感情. 日本家政学会誌, 11(52): 1069-1082.

中間玲子 (2014) 青年期の自己形成における友人関係の意義. 兵庫教育大学研究紀要, 44: 9-21.

Ogihara, Yuji (2016) Age differences in self-linking in Japan: The developmental trajectory of self-esteem from elementary school of old age. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 7(1): 33-36.

小島安香音・青木真理 (2018) 中学生の居場所感に関する研究—居場所感向上を目的とした活動実践を通して—. 福島大学総合教育研究センター紀要, 25: 25-32.

岡本美和子 (2006) 出産後2～3週の子どもの持続する泣

- きに直面した初産婦が情緒的動揺に至る要因の構造分析. お茶の水医学雑誌, 8(1): 54-2.
- 大森亨 (2008) 自然体験と感性・行動力・人格形成をめぐる覚書 持続可能性に向けた教育を念頭に. 教育と医学, 56(5): 60-67.
- Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent Self-image: Princeton, Univorsity Press New Jersey, p326.
- 坂本理香 (2021) 高校生の睡眠行動に影響するインターネット使用および運動部の検討—自尊感情, 友人との関係, 親との関係の調整効果の観点から—. 青年心理学, 1(33): 21-32.
- 杉本希映・庄司一子 (2006) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化. 教育心理学研究, 3(54): 289-299.
- 多田玲子・蛸崎奈津子・石井トク (2007) 親子との関係 自尊感情, 自己肯定感との関連. 母子看護, 38: 58-55.
- 高瀬淳也・中島寿宏 (2018) 運動・体育に対するへき地小規模校という環境の影響—小学6年生の学級規模による中学在学時の意識—. 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要, 5: 23-28.
- 田中秀樹 (2011) 地域・学校での睡眠相図と睡眠指導. 宮崎総一郎・大川匡子・山田尚登 (編著) 睡眠学Ⅱ. 北大路書房: 京都, pp101-114.
- 谷 篤彦・大西恭子・井上果子 (2016) 僻地学校における中学生の特徴—へき地と都市部の比較から—. 横浜国立大学大学院. 教育相談. 支援総合センター研究論集, 3(16): 41-53.
- 東京都府中市役場 (2023) 住民基本台帳による人口. <https://www.city.fuchu.tokyo.jp/smph/gyosei/toke/jyukijinko/jinko.html>, (参照日 2023年1月15日).
- 東京都教育センター (2010) 自尊感情や自己肯定感に関する研究 (第3年次). https://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/files/bulletin/h22/h22_01, (参照日 2023年1月15日).
- 東京都小笠原村役場 (2023) 小笠原村について. 概要. <https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp>, (参照日 2023年1月15日).
- 東京都大島町役場 (2023) 町勢データ. <https://www.town.oshima.tokyo.jp/soshiki/jumin/towndata-index.html>, (参照日 2023年1月15日).
- 豊田秀樹 (2004) 共分散構造分析「入門編」構造方程式モデリング. 朝倉書店: 東京.
- ト部 明 (2017) 子どもの自尊感情と親子のコミュニケーションとの関連. 研究紀要, 51: 1-8.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸測面の構造. 教育心理学研究, 30(1): 64-68.
- 山下久美・首藤敏元 (2008) 虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について. 埼玉大学紀要, 57(2): 105-121.
- 楊 依梵・清水寿代 (2022) 夫婦関係と養育態度が子どもの問題行動に及ぼす影響. 幼年教育研究年報, (44): 57-64.
- 横山和仁 (2005) POMS 短縮版 手引きと事例解説. 金子書房: 東京.
- 横山正幸 (2010) 子どもの自尊感情と体験の関係について. 日本生活体験学習学会誌, (10): 53-62.

〈連絡先〉

著者名: 池本彩乃
住 所: 東京都世田谷区深沢7-1-1
所 属: 日本体育大学大学院
E-mail アドレス: 21pma21@nittai.ac.jp